

人文科学研究科社会人類学専攻

(学修番号 11959101)

王 一茹 (Wong Yat Yu)

指導教授 伊藤 真

Chinese Ethnic Schooling in Japan: Identity Formation among Students

(日本における華僑華人の学校教育 —生徒たちのアイデンティティ形成—)

論文要旨

1. 研究目的

本論文の目的は、日本における中華学校で行われる民族教育、特に教師から学生へ伝達されるアイデンティティに関するメッセージ、及び華僑華人学生のアイデンティティが形成される過程を、彼らの教育の経験や個人の語りを辿りながら明らかにすることである。中華学校においてアイデンティティは如何に民族教育を通じて伝達および継承されるのかという問題を考察し、学生が如何に日中文化に順応・適応し、社会化していくかという過程を検討する。また、学校コミュニティ内で立ち現れる人間模様を描き出すことで、集団内の秩序と日常的な経験の意味を明らかにする。そこからより広い社会領域との関係性を分析し、多文化共生のあり方と可能性を探求する。

いままでの日本における華僑華人研究は、商人を主な対象として、かれらが如何に華僑華人社会を維持しているかという問題や華僑華人の歴史、華僑華人のアイデンティティの現状を論じたものが多い。しかし、華僑華人社会の存続に重要な影響を与えている華僑華人の学校教育に関する研究は少ない。本論文は筆者が華僑華人の民族学校において実施した参与観察、そして教師、生徒及び保護者に対するインタビューを通して、学校教育と家庭背景は如何に生徒のアイデンティティ形成に影響を与えているかを考察し、華僑華人研究に貢献することを目指す。

2. 論文構成

本論文は、目次・謝辞・凡例 i～vii、本文 189 頁（1 頁 20 行）からなる。なお本文には参考文献一覧、付録 A・B、表 4 枚、写真 10 枚が含まれる。本文はつぎのような章構成である。

Chapter One: Introduction

(第 1 章 序章)

Chapter Two: Chinatowns and Chinese Ethnic Schools in Japan

(第 2 章 日本における中華街と中華学校)

Chapter Three: Parents' Expectations and Educational Strategies

(第 3 章 保護者の期待と教育戦略)

Chapter Four: Multicultural and Chinese Ethnic Messages Taught at Yangzhen School

(第 4 章 中華学校で伝えられた多文化的及び中国的アイデンティティに関するメッセージ)

Chapter Five: Students' Identity Formation

(第 5 章 生徒のアイデンティティ形成)

Chapter Six Conclusion

(第 6 章 結論)

Bibliography

(参照文献)

Appendix A: References in Japanese

(付録 A: 日本語文献目録)

Appendix B: Photos of School Life

(付録 B: 学校生活の写真)

3. 論文概要

第 1 章 序章

序章では、本論文を中心的に検討するアイデンティティ(identity)、文化化(enculturation)等につき、まず概念の由来と概念の射程を確認した上で、学校と民族文化教育、生徒のア

アイデンティティ形成における家庭と教育環境の影響などの問題提起をする。さらに、本論文における研究手法、理論的な着眼点を記述した。本論文のテーマである文化的アイデンティティの定義はスチュアート・ホール[Hall 1989]を援用する。ホールが定義した文化的アイデンティティには二つの視点がある。まず、共有された文化によって文化的アイデンティティを定義するものである[Hall 1989:69]。中華学校の生徒の場合、共有された文化は学校や家庭で伝達される中華文化であり、他方、生活している日本社会の文化でもある。第二の視点は、文化的アイデンティティを本質主義的な視点によらず、歴史や文化の言説における自己確認、位置取りとして捉える[Hall 1989:71]。つまり、アイデンティティは完成されるものでも、固定的、永続的なものでもなく、複数のアイデンティティが共存することが可能である[山本 2002:21-22]。このような視点を中華学校の生徒に当てはめるならば、かれらは家族親族から固定な文化を継承するだけでなく、継続的に学校の教育を含む日常生活の中で自己確認を行う存在としてとらえることができる。別言すれば、文化的アイデンティティは自己形成の過程で、個人の選択と自己確認とに深く関わっている。なお、本調査においてインタビュー対象となったのは、生徒 27 名（出生地の内訳は、日本 16 名、中国大陸 9 名、台湾 1 名、マレーシア 1 名）、教職員 17 名（国籍の内訳は、台湾籍 9 名、日本籍 7 名、中国香港籍 1 名）、保護者 11 名（国籍の内訳は、台湾籍 6 名、中国大陸籍 3 名、中国香港籍 1 名、日本籍 1 名）である。

第 2 章 日本における中華街と中華学校

本章では、文献をもとに日本における三つの中華街とそこに見出される五つの中華学校の歴史を概観する。特に、横浜中華学校の歴史、元来一つであった学校が二つに分裂した経緯を考察する。華僑華人生徒の生活空間と社会背景を考察し、さらに中華学校は如何に華僑華人団体・組織の一つとして華僑華人社会を支えているのかについて明らかにする。

本章では従来の研究を踏まえ、まず日本における華僑華人をつぎの 4 タイプに分類する。すなわち「日本国籍を持つ華人」、「外国国籍をもつ華僑」、「1972 年 以前来日した老華僑」と「1972 年以降来日した新華僑」の 4 タイプであり、それぞれの形成と特徴等を述べた。第二次世界大戦以前、日本における華僑華人のアイデンティティは、国よりも出身地への

帰属に基づいていた。例えば、その当時、横浜中華街では広東出身者が多く、日常生活では広東語が用いられ、学校でも広東語による教育が行われていた。第二次世界大戦を経て1949年に中国で共産党と国民党により二つの政府が生まれると、日本の華僑華人社会も両者のいずれを支持するかにより分かれ、それぞれが別個の団体、学校をもつようになった。そうした中で、中華学校の教育では、地方への帰属意識ではなく、政治的なアイデンティティが強調される時期が続いた。しかし、近年、徐々に華僑華人社会にもグローバル化の波が押し寄せにつれて、中華学校への入学生とも多様化するようになった。それまで、華僑華人だけを対象としてきた学校にも新たな対応が迫られるようになったのである。

第3章 保護者の期待と教育戦略

本章はインタビューした11人の保護者のうち4人の事例を取り上げ、華僑華人の保護者が自分の子供を中華学校に入学させる動機及び保護者としての家庭教育の方針について考察する。保護者が子供に対する期待、特に子供のアイデンティティ形成に対する期待が如何に子供たちのアイデンティティに影響を与えるのかを考察する。また、保護者自身の異文化経験についての個人的な語りを通して、保護者の観点と態度を分析し、彼らの観点と態度がどのように子供たちのアイデンティティ形成過程の一部になることを明らかにする。

事例の分析からわかるのは、保護者は二つまたは二つ以上の言語が話せるという文化資本を有し、それを子供たちに継承したいと考えていることである。彼らはこのような文化資本は子供たちの将来の成功に繋がると信じているので、保護者は子供たちに中華学校で勉強させようとする。また本章では、家族の類型と子供のアイデンティティとの関連性を明らかにする。夫婦が同じ出身地である場合、子供に保護者自身の出身地のアイデンティティと中国語の習得を強く期待し、子供もそのアイデンティティを持つ傾向がある。一方、国際結婚による家庭の保護者でも、子供が中国語の学習することを期待し、少なくとも片方の親は、中国人というアイデンティティを伝えることを望むが、子供はそれを受けいれようとしなないという現状が指摘される。

第4章 中華学校で伝えられた多文化的及び中国的アイデンティティに関するメッセージ

本論文は、異文化接触状況での人間形成に関わる教育人類学的研究や、文化的アイデンティティ及びエスニック・マイノリティへの教育研究に焦点をあてている。志水によれば、学校というのは、「文化伝達の機関としての学校が持つ、文化的特徴」という意味を持つと説明する。学校文化は「内容としての学校文化」と「型としての学校文化」という二つの要素から成り立ち。前者は、「学校で伝達されることを期待される文化＝知識の具体的な中身である」と考えることができ、後者は、「前者の知識を子供たちに伝える際の、学校という組織なり制度なりが持つ特徴である」を考えることができる。具体的には授業の時間割のあり方、教師の統制のあり方、授業や評価の方法、生徒集団の編成の方法、校則のあり方など様々なものとされている[2005:38-39]。本章ではこのような学校文化と子供たちのアイデンティティ形成との関連を検討する。

まず A 中華学校の現状、教師の教育理念、そして実践を考察する。学校の教育方針は主に中華文化を継承することであるにも関わらず、学校の課程では中国語と日本語両方の習得が重視されており、事実上、民族教育よりも多言語・多文化教育が進められている。グローバル化と世代交代にともない、教師が伝達するエスニック・アイデンティティのメッセージも国家帰属にとらわれないものになりつつあることが指摘される。

第5章 生徒のアイデンティティ形成

教育人類学の中心的概念は「文化化」(enculturation)である [山本 2002:13]。江淵によれば、この文化化の要素は、文化化の代行者、文化の習得者、伝達・習得される文化内容、及びシンボル・システムの四つであり、「言語、道具・技術、集団関係、信仰等のすべてが、何らかのシンボルを介して個人に内面化されることによって、個人はその文化およびその文化をもつ集団に対する帰属感、すなわち集合的アイデンティティを獲得する」[1994:36]。本章では「文化の習得者」である生徒に焦点を当て、この文化化の要素を検討することによって、二つまたは二つ以上の文化がどのように多文化教育という環境で獲得されるのかを明らかにする。

具体的には、筆者がインタビューした 27 人の生徒のうち 7 人の事例を取り上げ、生徒が

如何に自己のアイデンティティを選択し、認識するのかを記述し、分析する。事例の分析の結果から、生徒のアイデンティティは主に台湾人、中国人、日本人、ダブルアイデンティティ、及びトランスナショナル・アイデンティティという五つの類型に分類することができ、その中ではダブルアイデンティティが最も多数を占める。ダブルアイデンティティとは、生徒が場所と状況によって、自分が中国人または日本人であることを主張する者である。そこでは、アイデンティティの非固定性、状況依存性が明らかになる。

第6章 結論

本論文は、在日中華学校に通っている子どもたちの教育経験を調査し、そのような教育経験がどのようにアイデンティティ形成に影響を与えているかを、参与観察とインタビューにより検討した。本章では、その結果をエスニシティ論との関連で整理する。

エスニシティは人々が「エスニック集団への帰属感およびエスニックな文化的連帯感とプライドに基づき、相互に結び付いている心理的・社会的状態を指す」[過 1999:6]。エスニシティ論では、「エスニック・アイデンティティがなぜ存続するのか、その源泉となるものは何かが中心的な関心とされてきた」[山本 2002:23]。山本はエスニシティ論の中で、アイデンティティの個人的な経験と、集合的な記憶との連結の問題を提起した。山本はロンドンの中国系二世世代のアイデンティティを研究し、中国系の若者と日系アメリカ人のエスニシティの違いを指摘した。日系アメリカ人は強制収容のようなマーカーとなる共通の歴史的記憶があり、個人的アイデンティティと政治に関する集合的アイデンティティとを結びつけている。しかし、ロンドンの中国系の若者は政治に関する記憶には無関心であり、彼らのアイデンティティは政治に関する集合的アイデンティティに連結せずに、個人の経験に基づき形成された[2002:23-27]。本論文で議論した生徒のアイデンティティの形成は、個人が自分の意志に基づき、周囲の人との相互作用の中で自分の位置取りを選択する過程であることを主張し、同時に政治に関する集合的アイデンティティと関連していることも明らかにした。

本論文は、アイデンティティ形成のプロセスの一部として、中華学校の教育を取り上げ、華僑華人学生は如何に多文化の環境に、多様なアイデンティティの形成過程を明らかにし

た。日本社会における中華民族教育とエスニック・アイデンティティに関する研究を通して、現代のグローバル化のなかで日中の文化関係について理解を深め、両者間の今後の活動に貢献できると考えられる。日中の言語を同時に教える中華学校での調査は、マイノリティへの民族教育の意義と将来性について教育人類学的視座から提言が可能である。また、在日華僑華人教育の歴史と現状、及び現場での参与観察に基づき、華僑華人教育がどのように生徒たちのアイデンティティ形成に関わり、それが海外華僑華人のエスニシティに影響しうるかについても提言した。

21 世紀に入り、中華街には新しい変化が起きており、それに伴い、中華学校の役割、位置づけ、生徒の知識習得以外にも、学校のエスニック教育によるアイデンティティの形成の面にも変化を示す諸現象が起こっている。本論文はその動向を示した、最新の研究の一つである。21 世紀以来の中華学校の生徒構成の新しい変化、保護者の心境の変化、生徒の意識動向について、新鮮なデータ・資料を提供できた。それらは、とくに学校教育とアイデンティティ形成に関する今後の華僑華人研究に貢献しうると信じる。

参考文献

江淵 一公

1994 『異文化間教育学序説—移民・在留民の比較教育民族誌的分析』九州大学出版会。

過 放

1999 『在日華僑のアイデンティティの変容』東信堂。

志水 宏吉

2005 「学校文化を書く—フィールド・プレーヤーとして」秋田喜代美・恒吉 僚子・佐藤学（編）『教育研究のメソドロジー—学校参加型マインドへのいざない』東京大学出版会、37-49。

箕浦 康子

1984 『子供の異文化体験—人格形成過程の心理人類学的研究』新思索社。

山本 須美子

2002 『文化境界とアイデンティティ—ロンドンの中国系第二世代』九州大学出版会。

- Glazer, Nathan. 1975. "Ethnicity: A World Phenomenon." *Dialogue*, no. 8: 35-46.
- Hall, Stuart. 1989. "Cultural Identity and Cinematic Representation." *Framework*, no. 36: 69-81.
- Willbert, Johannes. 1976. "Introduction." In Willbert Johannes, ed., *Enculturation in Latin America: An Anthology*, pp. 1-27. Los Angeles, Calif.: UCLA Latin American Center Publications.